

## 公開シンポジウム「新しい奄美世界の創出」に多数の参加者 - プロジェクト研究に地元からの熱い視線

-

著者	平井 一臣
雑誌名	奄美ニューズレター
巻	3
ページ	23-24
別言語のタイトル	A Large Audience at the Public Symposium on "Creation of New AMAMI"
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/17540">http://hdl.handle.net/10232/17540</a>

## ■ 島嶼スケッチ

## 公開シンポジウム「新しい奄美世界の創出」に多数の参加者

## ープロジェクト研究に地元からの熱い視線ー

平井 一臣 (プロジェクト事務局長)

1月31日(土)、名瀬市のサンプラザホテルを会場として、本プロジェクトによる最初の公開シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、第1部「研究討論会ー奄美研究の過去・現在・未来ー」、第2部「研究討論会ー島嶼圏開発をめぐる諸問題ー」、第3部「総合シンポジウム」(学長基調講演と「奄美研究と奄美開発の接点」をテーマとしたシンポジウム)の3部から構成されており、かなりボリュームのある企画内容となった。

主催者側では、研究発表中心の第1部及び第2部については、それほど多くの参加者はないのではないかと予想していたが、嬉しいことに、第1部から多くの参加者がつめかけ、最初から最後まで熱のこもった報告と活発な質疑討論が行われた。以下では、簡単に当日の公開シンポジウムの概要を紹介しておきたい。

まず第1部では、皆村武一氏(鹿児島大学教授)、堂前亮平氏(久留米大学教授)、前利潔氏(知名町役場)の3名の報告者が、それぞれの奄美研究との接点に触れながら、今後の奄美研究の展望について自説を展開した。皆村氏は、とくに奄美の戦後経済の総括をふまえながら、今後の自立的発展のための課題を示し、堂前氏は、沖縄国際大学での奄美調査や自らの寄留商人研究を紹介したうえで、地域の成り立ちやその背景をさぐる重要性を指摘した。さらに、前利氏は、近年の若手研究者による新たな奄美研究の台頭などにも触れ、境界域に位置する奄美という視点から考えることの重要性を指摘した。3名の報告者による報告の後の質疑討論では、復帰運動の意味づけや奄美経済の評価の視点などを中心とした意見のやりとりがあった。

第2部は、北村良介氏(鹿児島大学教授)、上田不二夫氏(沖縄大学教授)、坂田裕輔氏(鹿児島大学助教授)の3名の報告者が、島嶼圏開発の問題を奄美の具体的な問題に引きつけたかたちで報告した。北村氏は、赤土流出問題などについての自然科学分野での研究の現状や、この問題に対する具体的対応策のあり方などを中心に話をし、上田氏は、奄美、沖縄の水産業の現状を総括し、日本全体のなかでの奄美・沖縄の水産業の位置づけや、水産業に関連する流通の問題の重要性などを指摘した。坂田氏は、屋久島におけるエコ・プロジェクトの経験と研究成果を紹介しながら、環境ガバナンスを考えていくうえでの課題を提起した。以上の報告がなされた後、会場からは多くの質問や意見が出された。赤土問題の現状認識にかかわる問題の指摘や、水産業における沖縄と奄美との相違など、かなり具体的なかたちでの意見のやりとりが行われたことが第2部の特徴だった。

第3部では、前半で永田行博学長による基調講演「"復帰50周年"を終えた奄美と大学の役割」が行われる予定だったが、残念ながら学長が体調不良のために参加を断念されたため、辰村吉康大学院人文科学研究科長が代読することとなった。辰村研究科長は、代読に先立って、人文社会科学研究所による名瀬市でのサテライト教室の開設など、この間の奄美での取り組みなどを紹介したうえで、基調講演を代読した。(内容は、本誌に別掲)。

公開シンポジウムの最後をかざり、「奄美研究と奄美開発の接点」をテーマとするシンポジウムが約2時間行われた。パネリストとして、迫田昌氏(鹿児島県企画部長)、叶芳和氏(拓殖大学教授)、藺博明氏(環境

ネットワーク奄美代表)の3名が登壇、山田誠氏(鹿児島大学教授、本プロジェクト代表)のコーディネートのもとに進められた。まず最初に、3名のパネリストから、奄美開発についての問題点と課題について、それぞれの立場から発言があり、その後、三名のパネリストにコーディネータが加わるかたちで、相互の意見交換が行われた。とりわけ奄振事業の問題点や、今後の奄振事業におけるソフト部門の位置づけや交付金化の問題をめぐって、かなり激しいやりとりが行われた。鹿児島県のこれまでの奄振事業の問題点ばかりでなく一定の成果をあげたことも視野に入れ、そのうえで今後の奄振事業を構想すべきだとする迫田氏、交付金化を中心とした大胆な制度改革の必要性を訴える叶氏、奄振事業による環境破壊の現状を指摘する藺氏、といった三者による熱のこもった討論に、会場の参加者も耳を傾けていた。パネリストを中心としたやりとりが一段落した後、フロアからの質問や意見発表が行われ、そこでもまた奄振事業の問題点を中心とした様々な意見が出された。シンポジウムは予定の時間より15分おくれて夕方6時に終了したが、参加者のほとんどが最後まで退席することなく討論に参加していた。

ほぼ丸一日の研究会とシンポジウムを終えて、懇親会が開催されたが、約60名が出席した。約2時間の懇親会のなかで、今回のシンポジウムの意義や今後の課題、そして相互の情報交換などがなされ、パネリストとしてもご協力していただいた県企画部長の迫田氏の挨拶をもって、すべての日程を終了した。

今回のシンポジウムは、鹿児島大学全学総合プロジェクト「島嶼圏開発のグランドデザイン」による、最初の大規模な大学外での取り組みとなった。シンポジウムには150名以上の参加者があったこと、そして、参加者には地元の行政・議会関係者、教育関係者、郷土史関係者など多彩な方々が含まれていたこと、さらに、奄美大島だけでなく、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島といった他の島々から、さらには沖縄か

らの参加者もあったことなど、予想以上に多様で多数の参加者が得られたことが何よりも収穫であった。奄美では昨年1年間、様々な復帰50周年に関するイベントが開催されていたため、果たしてどれくらいの参加者があるのか、正直なところ不安であったが、こうした予想を覆す参加者があったことは、地元での本プロジェクトに対する期待の大きさを意味しているように思われる。実際に、このようなプロジェクトを次回は名瀬市以外の奄美群島で開催してはどうかとの要望もあがり、プロジェクトとしてもその方向で検討を進めなければならないと考えている。

また、研究報告会及びシンポジウムの中身であるが、各報告者やパネラーの方々の興味深い内容の話を提供できたのではないかと思う。とくに学外からお招きした方々には、私たちのプロジェクトの意義を理解していただいたうえで、大変熱のこもった報告をしていただいたことに非常に感謝している。

以上のようなシンポジウムの内容については、当時の記録を中心として1冊の本として刊行し、広く市民の眼にも触れるかたちで公表していく予定であり、現在そのための準備を進めている。私たちのプロジェクト研究に関心をもたれた方は、本が出版された際には是非ご一読願えればと思う。また、シンポジウムで出された様々な意見は、今後のプロジェクト研究にも活かされていくことになろうかと思う。その意味では、今回のシンポジウムは、本プロジェクトの最初の第一歩にすぎず、次のステップに進むための研究活動を今後一層進めて行かねばならない。

最後になったが、今回のシンポジウムの準備を進めていくに際して、後援団体にもなっていたいただいた奄美群島広域事務組合には、様々なご協力とご支援を頂いた。心から感謝申し上げたい。

(プロジェクト事務局長、平井一臣)